



あすなろ通信

9月
2025年
9月号
September



長かった暑い夏が終わり、そろそろ季節の変わり目です。
健康に気をつけて、フレッシュな気持ちでがんばりましょう。

9月の行事

- 1日(月) 2学期スタート
- 8日(月) カウンセリング
- 9日(火) 外国語学習
- 17日(水) 理科学習
- 24日(水) 美術活動
- 26日(金) 防災センター見学



暑い日が続く、健康面の心配をしながらの2学期のスタートでしたが、みんな元気です。これからは季節の変わり目、新しいステージへと進みます。元気でいられるように、引き続き健康管理をお願いします。



防災センター見学・体験



外国語学習



理科学習



美術活動

【室長コラム】

金子みすゞの詩「こだまでしょうか」をふと思い出した。

子どもたちと共に行動していると、つい「できないこと」に目を奪われてしまいがちである。学習が苦手、友だちとうまく遊べない、ルールが守れない。——そんな姿を見ると、心配や焦りから、子どもの行動を批判したり、厳しい言葉で責めてしまうことがある。しかし、失敗した子どもが本当に必要としているのは、厳しい評価や批判ではなく、受容と前を向くための言葉だろう。

「こだまでしょうか」には、こんな一節がある。

「『遊ぼう』っていうと『遊ぼう』っていう。『ばか』っていうと『ばか』っていう。」

この詩は、言葉がこだまのように返ってくる様子を描いたものであるが、実は人と人との関係性を私たちに問いかけている。特に子どもは、大人の言葉や態度をそのまま感知し、心に刻む存在だ。優しい言動には安心と喜びを、冷たい言動には不安や恐怖を感じる。つまり、私たちの言動が、子どもたちの心の土壌をつくっていると言える。

私たちは評論家ではない。第三者的に「なぜできないのか」「なぜわからないのか」と声高に批判するのではなく、まずはできないということを受け入れ、そこから前を向いて行動できるように、温かく、わかりやすい言葉と行動で、支援していくことが大切である。子どもは未完成で、揺れ動く存在だ。まだまだこれからであり、必ず成長する力を持っている。だからこそ、私たち大人がまず、「こだま」のように優しい言葉を返すことが大切だ。愛情の感じられない批判ではなく、温かい共感。できないことばかりに目を向けるのではなく、子どもの心に寄り添って共に歩むことこそが、子どもの成長エネルギーとなる。

金子みすゞの詩はこう締めくくられている。

「いいことを言うと、いいことが返ってくる。悲しいことを言うと、悲しいことが返ってくる。こだまでしょうか。いいえ、誰でも。」

この「誰でも」という言葉には、子どもだけでなく、人はみな言葉に心を動かされる存在だというメッセージが込められている。だからこそ、私たちは子どもに対して、優しさと信頼をこだまのように返していきたい。たとえ子どもの言葉がマイナスの言葉であったとしても、その裏に潜んでいる心を読み取って、プラスのこだまを返していきたい。それが、未来を担う子どもたちを育てる大人の大切な役目だと思う。



「あすなろ教室」

TEL 0897-37-7474

FAX 0897-32-6822

e-mail asunaro@city.niihama.lg.jp

